

寝屋川流域総合治水対策事業

保水・遊水機能を街に取り戻し、日々の暮らしにも潤いを。

大阪市東部を含む12市に広がる寝屋川流域^{*1}。その治水の歴史は、仁徳天皇の時代にまで遡ります。かつては海だった流域を整備し、暮らしに安全・安心をもたらしてきた治水対策は、今日では、さらに市民と行政が協力して行う親水空間の創造へと広がっています。今回は、寝屋川流域の取り組みを通じ、これからの総合治水や防災のあり方を考えていきます。



レポーター：佐藤 香奈子さん

市民と行政が一体で取り組む「治水対策」「水辺の再生」に、感動しました。



寝屋川市駅前「せせらぎ公園」



多くの市民の呼びかけで「大型カヌー」での川下りを実施



寝屋川で生息する魚類の一例（左からアユ、テナガエビ）

氾濫が絶えなかった寝屋川水系、進む「流域」の総合治水対策

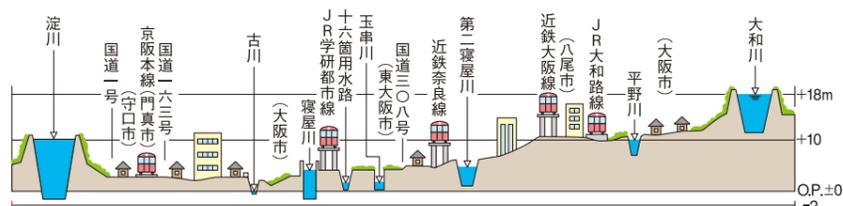
寝屋川流域の歴史を遡ってみると、6千～7千年前までは生駒山麓あたりまでが海だったため、河内湖と言われています。その後、生駒山地からの流送土砂の堆積で次第に陸化が進み、河内平野になりました。河川は洪水などの氾濫が絶えず、仁徳天皇の時代に日本最初の堤防（茨田堤）が築造され、1596年（文禄5年）には豊臣秀吉により淀川左岸の堤防が修復（文禄堤）されました。さらに江戸時代の1704年には、河内郡の庄屋中甚兵衛らにより大和川の付け替え工事などが行われ、それ以降、現在の寝屋川流域が形成されていったそうです。

寝屋川流域の特徴は、その約4分の3が、地盤が河川よりも低く内水域になっていることです。そのため、降った雨はすぐには河川に流れず、まず下水道に集められ、ポンプで強制的に河川に排水されています。しかし、その雨水の出口が寝屋川の京橋口の一カ所のみであったことから、たびたび洪水の被害にあってきました。こうした事態打開のため、国、大阪府及び寝屋川流域の各市が寝屋川流域の総合治水対策を協議することになりました。現在では、河川改修工事をはじめ、遊水池、流域調節池、放流施設、地下河川などの整備とともに、民間企業や市民にも協力を求め、大雨の際には雨水の流出を抑制するなど、総合的な治水対策が進められているそうです。

■寝屋川水系流域図



■大阪中央環状線沿線断面図



寝屋川再生へ、市民と協働で取り組む親水護岸の「せせらぎ公園」

一級河川・寝屋川の再生については、公募に立候補した市民全員を委員とするワークショップ（寝屋川再生ワークショップ）が発足。小学生から大人までの委員が協議を重ね、市民として果たすべき役割を行政とともに担っていくこと「寝屋川再生プラン」の提案が実施されました。そして、それに伴い委員を中心とした自主組織（ねや川水辺クラブ^{*2}）も結成されました。さらには、先行して個別に活動していた団地自治会や青年会議所とも連携し、自主参加した多くの市民と一緒に川の清掃や生き物調査、源流の山を育てる間伐作業などが行われました。生態系に配慮する上で川の直線化、コンクリート化などの問題点も考えながら、次々と再生プランが進められているそうです。

寝屋川市駅前の寝屋川せせらぎ公園^{*3}は、そうした再生プランの第一弾です。さまざまな市民のアイデアが盛り込まれており、空石積み護岸に瀬・わんどを配したり、河底の藻や周辺の樹木などは源流域から調達するなど、生き物が定着できるように最大限工夫された親水空間となりました。護岸を歩きながら川をのぞいてみると、あちこちで魚影が確認できました。アユ、ウナギ、ナマズ、テナガエビなどいます。最近では、こうした取り組みで基礎工事以外の測量、仕上げ工事、設備の設置、植栽から完成後の維持管理までを行う「市民土木工事」のような活動が増えていると聞き、感動しました。素晴らしい試みですね。

^{*2} 「ねや川水辺クラブ」は、さまざまな活動で「関西まちづくり賞」（日本都市計画学会関西支部）、「土木学会関西支部市民土木大賞“市民と歩む土木の業績部門”」などを受賞しています。
^{*3} 寝屋川市駅西広場に隣接した大和橋～外島橋～外島新橋間（延長220m、最大幅28m）に造られ、せせらぎ、植栽空間、ウッドデッキ、船着場、遊歩道、沈下橋などがある。



せせらぎ公園での生き物調査



水に親しむことで、治水事業の重要性も実感できますね

風力発電の電気で川の水を汲み上げ、木炭浄化し、せせらぎに流しています

